

故郷の人物を知ろう

たかおか

おん こ ち しん

温故知新

全国に名を知られた女流俳人

じよ
沢田はぎ女(1890~1982)

はぎ女は西五位村三日市(現福岡町三日市)の農業・長沢幸次郎の二女として生まれました。本名は初枝。1906年、福田村和田(現和田)の銀行員・沢田弥太郎(1883~1950)に嫁ぎました。夫は「岳楼」と号する俳人であり、和田の西光寺住職・寺野守水老や筏井竹の門らが結成した俳句会「越友会」に属していました。はぎ女も句作を始め、夫や守水老らに師事しました。はぎ女の実力は上達し、1907年から1912年まで「国民新聞」(東京新聞の前身)俳句欄を中心に『ホト・ギス』などに盛んに選句され、選者の高浜虚子や松根東洋城など日本を代表する俳人から最上級の讃辞を受けました。また『新春夏秋冬』、『ホトギス雑詠集』などの雑誌・句集に600句以上が収録され、全国にその名を知られました。

しかし、女流俳人の少なかった当時、はぎ女の句は夫の代作との噂がたつと、夫と姑に育児・家事に専念するよう厳命され、1913年、はぎ女は句作を断念します。はぎ女は、中央俳壇に彗星の如く現れて消えた「幻の女流俳人」とされ、地元俳人ら



肖像(『はぎ女句集』より)

に中傷されたり、ついには「はぎ女架空説」までささやかれるなど注目を集めました。俳人の池上不二子は1957年、著書ではぎ女を紹介。更に直接はぎ女にインタビューをしてその実在を証明して汚名を晴らし、1963年には『はぎ女句集』(329首収録)も編集しました。その顛末は作家・吉屋信子によって1965年、雑誌に「はぎ女事件」として詳しく書かれました。

代表句に「死に絶えし家に隣りて冬夜かな」、「そなさんと知つての雪の礫かな」などがあります。

(仁ヶ竹主幹)

問合せ 博物館 TEL 20-1572